

先日、「不寛容社会」をテーマとするNHKの討論番組を見ました。それによると、人はもともと不寛容であるようですが、同調（仲間）意識の高さがかえってその不寛容さに拍車をかけてしまう場合があるようです。私たちは普段から、人にしろ、本にしろ、メディアにしろ、自分の考えを支持してくれる人、自分の考えと合うもの、自分が共感できるものを求めがちであり、そのようななかで形成されたグループやつながりに居心地の良さを感じています。人間の営みとして自然なことです。しかし、それに馴れすぎているあまり、自分と異なる意見を持った人やグループとの対話・向き合い方が不得手であることも否めません。同調（仲間）意識が高ければ高いほど、自分達の主義主張に安住し、自己批判できないまま、不寛容になってしまう落とし穴があるようです。とは言え、自分の間違いを指摘されることは、時に自分の存在価値を否定されるような不安や嫌悪感を抱かせますから、簡単に受け入れられるものではありません。不寛容さは、自らの手で形作ってきた自分の存在価値を必死に守ろうとする裏返しなのかもしれません。

イエスは徴税人や罪人と一緒に食事をしました。徴税人は、ローマ帝国に仕え、その巨大な権力を後ろ盾に、税金を余分に請求して私腹を肥やしていたようです。罪人は、何らかの形で当時のユダヤ社会の律法を破った者のことを指しています。そのような人々がいる一方で、ローマ権力に媚売ることなく、ユダヤ律法に忠実に生きていこうとしていたのがファリサイ派と呼ばれるグループでした。並大抵の努力ではありません。ですので、仮にイエスが救い主なのだとなれば、自分達と交わるべきなのに、なぜ徴税人や罪人と一緒に食事をしているのか、意味が分からなかったのです。そんな彼らに対して、イエスは「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」、それが「どういう意味か、行って学びなさい」と言われました（13節）。

旧約聖書創世記に記されたアダムとエバの物語を思い出します。二人は、神のように善悪を知る者になりたいと願い、禁断の実を食べますが、それによって知り得たのは、自分達が神の憐れみなしには生きえない、丸裸の存在であることでした。二人はそれを恥ずかしく思い、覆い隠そうとしますが、神は初めからそのありのままの丸裸の二人を愛し続けていることが読者に示されます。私達が、それぞれの場に遣わされて学ぶこと…それは、最終的に、私達が覆い隠し切れずに露わにされてゆく自らの過ちや弱さや愚かさなのかもしれません。しかし、その時初めて、私達は主イエスが徴税人や罪人と一緒に食事をなさった意味を学ぶことになるのです。

（文責：望月達朗牧師）

